

臼井田宿内砦跡の発掘調査成果（H30年度）

【弥生時代～古墳時代】

・昨年に引き続き、弥生時代後期及び古墳時代後期の住居跡が合計6軒検出された。中世以前は、全体に集落が広がっていたと思われる。

【中世・近世】

・平坦地を囲むように3条の溝が廻っていることがわかった。発掘調査担当者の所見では、一番外側の溝が中世期であり、その他は近世期のものとされている。一番内側の溝は、東辺は未調査であるが、北・南辺に20メートル以上、西辺に30メートルで「コ」の字状を呈している。

真中の溝は、東西40メートル以上に延びているが、その北端・南端を把握できていない。

一番外側の溝は東西60メートル以上を呈し、その南端にて西に折れ、調査区南側に残欠する土塁に沿って「L」字状に巡っている。土塁は、地山を削り出して構築されている。この土塁と溝は、現地形では南部の腰曲輪から昇りやすくなっている斜面に対応する位置にあり、出入り口を形成している可能性もある。また、周囲では中世土坑や台地整形区画が検出されている。

・3m程の高さを有する南西側の土塁脇トレンチでは、土塁構築以前の溝を検出した。遺構の重複関係から、時期差があることが明らかになり、砦跡の変遷を知る上で貴重な成果となった。

・中世の出土遺物は少なく、15世紀代の陶器皿や皇宋通宝（初铸1039年）などが見つかっている。これまで臼井田宿内砦は戦国時代後期に機能していたと考えられており、その時期差を検討していく必要がある。

課題と展望

臼井城跡の支城としての機能を確認するための調査であるが、現在台地下にある長源寺の旧所在地とも言われ、検出された遺構について、検討が必要とされる。

今年度は地形測量と共に、南側の腰曲輪の調査を予定している。なお、発掘調査は今年度で終了し、次年度に整理作業・報告書を刊行し、市指定文化財の可否を協議する際の資料とする。